

# 特集 彦根ゆかりの画人たち

## 足軽辻番所サロン・芹橋生活

平成26年7月20日(日)彦根市芹橋二丁目5-19の旧彦根藩辻番所・足軽屋敷で開かれた「足軽辻番所サロン・芹橋生活」では、彦根城博物館学芸員の高本文恵さんが、江戸から明治までの彦根ゆかりの画人たちを解説されましたので紹介します。



楽しむ人がいました。

### 江戸期の絵の歴史

江戸前期には、絵は基本的に特権階級のみが享受していましたが、江戸中後期は、町人や農民にまで広がりました。

また、画人には、絵師という絵を依頼によって描き売るプロと、文人という趣味や素養として絵を描き

あき・直弼の兄・文化的な審美眼を持つ)の意向が反映していると考えられます。永海は、直弼、直憲にも仕え、廃藩置県後も井伊家に仕えます。

永海は、井伊家専属ではなく江戸の谷文晁の画塾にも属し、版木の挿絵も描いています。画風は、師の谷文晁と同じく多様な流派の折衷様式でした。

作品には、槻御殿の虎図、井伊直亮の肖像画があり、肖像画は、藩主として理想化していない写実的な作風です。



狩野永岳(かのう・えいがく)は、13代当主井伊直弼の時に御用絵師になったと推定され、直弼、直憲に仕えます。活躍の場は主に京都です。禁裏御用絵師で、京狩野家第9代です。画風は、初代狩野山楽の桃山風の華麗な画風を基本に、四条派、岸派、文人画派など当時の流行を取り込んでいます。

作品は、井伊直弼画像(清凉寺蔵:理想化した像)、長浜曳山鳳凰山太鼓図があり、有力家臣への下賜品、席画作品などが残されています。

狩野永珉(かのう・えいみん)も同時期の彦根藩の御用絵師ですが、余白を生かしたさっぱりとした江戸狩野風の画です。

### 彦根藩御用絵師の作品

御用絵師は、彦根藩から扶持を支給されて活動したプロの絵師です。記録上確認できる最初の絵師は大形(おおがた)四代です。1641年、彦根で御用絵師になった大形藤兵衛、養子の幽心、その養子の養川、実子の藤十郎は1747年、絵師を止めています。養子で家を継いでいること、江戸狩野と京狩野という別の系統から入ってきている点に特徴があります。

佐竹永海(さたけ・えいかい)は、1838年御用絵師となります。佐竹は、会津出身で、谷文晁の弟子です。大名の御用絵師として伝統的な狩野派ではない点が注目されます。背景には、先例や家の格



式よりも自らの感性を優先する12代当主井伊直亮(なお

### 江戸中後期の画人たち

森川許六(もりかわ・きょりく、1656-1715)は、彦根藩士で、松尾芭蕉の晩年の高弟として有名で、芭蕉が「画はとって予が師とし、風雅は教えて予が弟子とす。」というほど芭蕉に絵を評価されていました。代表的な作品は、百華賦(文と絵を組み合わせた作品)で、洒落た俳画が多く、特に芭蕉と弟子のそらの絵は有名です。

龍玉淵(たつ・ぎょくえん 1751-1820)は、

彦根藩儒学者で文人の龍草廬の子、同じく彦根藩儒学者で、多彩な才能をもち、特に狩野派風、文人画風の画を得意としました。

張月樵（ちょう・げっしょう 1772-1832）は、彦根の職人町（現在の本町）出身。父は表具師で、京で市川君圭（坂田郡醒ヶ井村出身）、松村月溪（呉春）に学び、のちに名古屋に定住し、尾張藩の御用も務めます。画風は、円山四条派風で、誇張やデフォルメを効かせた画もあります。



石田逸翁（いしだ・いつおう 1800-1869）は、彦根市高宮出身で京で活躍します。岸派の祖・岸駒門人の白井華陽の弟子で、画風は、岸派風で、圓常寺に作品があります。

石田秀蘭（いしだ・しゅうらん 1803-1863）は、逸翁の妹で、美しく繊細な花鳥を好んで描きました。

青根九江（あおね・きゅうこう 1804-1854）は、下魚屋町で藩主御用の茶屋を営む富商の子で、京で山本梅逸の門人として活躍します。画風は、中国・明・清時代の華やかな花鳥画を源流としながら、師梅逸より平明で淡泊な作品を描きました。

広瀬柏園（ひろせ・しょうえん 1801-1871）は、四十九町（現在の城町）の町人代官の子で、父の広瀬順固は、岸派の祖・岸駒に師事しており、父から画を習いました。大津で活躍し、三井寺円満院門跡・覚順法親王に招かれ、作品を残しました。大津祭りの山車の天井画などの作例があります。

万香（まんこう）は、城下に住む女性としか判っていません。もっぱら菊の絵をかき「菊万香」と呼ばれました。画風は、装飾的でデザイン的要素が強く琳派風、落款も琳派風です。

中島安泰（なかじま・あんたい 生没年不詳）は、七十人歩行身分の彦根藩士です。因幡出身で、江戸で狩野派を学び、帰国途中で彦根藩士の養子になったと言います。彦根で、庶子時代の直一弼や湖東焼の絵付師・床山、後に京都で活躍する岸竹堂に画

を教えています。画風は、狩野派風を基調とした墨絵や淡彩作品です。直弼の腹心・長野義言の賛が入った画があります。

岸竹堂（きし・ちくどう 1826-1897）は、中藪組足軽・寺居孫次郎重信の子で、中島安泰に画の手ほどきをうけ、京都の狩野永岳の門に入ります。しかし、狩野派を出て岸派三代の岸連山に弟子入りし、岸派を相続し活躍しました。作品には、御所の障壁画、有栖川宮家の御用作品があり、明治時代は虎図などがあります。画風は、江戸時代は岸派風ですが、明治になると写生の徹底や洋画手法の導入を図り、京都画壇に大きな影響を与えました。松原内湖の風景のスケッチが残っています。

大橋文岱（おおはし・ぶんたい 1846-1937）は、彦根の狩野素雪に師事して学んだ後、京で敦賀出身の四条派の内海元紀、塩川文麟に学んで、34歳で独立して彦根に帰郷し、終生彦根で活躍しました。博覧会や展覧会への出品が多数あり、天皇や井伊家の買い上げ作品もあります。作品には、教善寺（長曾根）本堂障壁画があり、画風は、文麟風の繊細な作品がある一方で、晩年は自由な描き方も目立っています。

岡島波香（おかじま・はこう 1863-？）は、彦根藩士の子で、明治、大正時代に井伊家の本邸（東京）の家職として働きながら絵を描きました。井伊直弼の三男で与板藩主の井伊直安と画の贈答を行うなど親しく交わっています。

遠城謙道（おんじょう・けんどう 1863-？）は、足軽遠城平之助の子で、桜田門外の変の後の直弼への世間の冷たい評価に、出家して直弼の墓掃除（豪徳寺）に一生を捧げることを決意し、37年間墓守を続けた人です。好んで俳画を描き、多くの人に求められました。画は吉田雪斎に学び、雪斎は岸竹堂とも関係したと言われますが、詳しくはわかっていません。

藩主やその家人達も画を描きました。11代当主直中の十男、新野古拙（にいの・こせつ 1808-1875）には、文人画風の山水図があり、13代当主直弼の三男 井伊直安（いい・なおやす 1851-1935）は、文人画風の山水図、油絵作品の不忍池や井伊直弼の肖像画などを残しました。

このように、彦根では多くの作品が生み出されましたが、その背景には、江戸、京都とのつながりが深いことと、画を習う伝統があったのです。

（文責：堀部 栄次）